

## 日本人の下顎大臼歯の形態学的研究

著者	菊地 正嘉
号	11
学位授与番号	60
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/36090">http://hdl.handle.net/10097/36090</a>

氏名（本籍）	きく　ち　まさ　よし 菊　地　正　嘉
学位の種類	歯　学　博　士
学位記番号	歯　第　6　0　号
学位授与年月日	昭和60年6月19日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
最終学歴	昭和48年3月 東北大学歯学部卒業
学位論文題目	日本人の下顎大臼歯の形態学的研究

（主査）

論文審査委員	教授 佐伯政友	教授 加賀山　学
		教授 三谷英夫

## 論文内容要旨

日本人約800人の下顎大臼歯の資料にもとづいて、主咬頭数、付加咬頭さらに咬頭接触型（溝型）の各大臼歯における出現率ならびにこれらの形状の出現について各大臼歯の左右側の相互関係および各隣在大臼歯間の相互関係を調査した。得られた結果は以下のとおりである。

1) 第6咬頭の出現に関しては各大臼歯間には有意の差はないものの、遠心の大臼歯ほど僅かに出現率が増加する傾向がある。

2) 第7咬頭の出現率は第一大臼歯よりも第二大臼歯の方がひくい。また本調査の範囲内では第三大臼歯にこの付加咬頭の出現がみられない。

3) 第5咬頭（遠心咬頭）の出現率は第一大臼歯について第三大臼歯が高率であり、第二大臼歯がもっともひくい出現率をしめている。

4) 主咬頭数、第6咬頭、第7咬頭ならびにY、+およびXの各咬頭接触型の出現に関しては、下顎各大臼歯の左右側の相互関係の方が下顎隣在大臼歯間すなわち歯種内のそれよりも高い傾向にある。しかし最遠心の第三大臼歯が関係する限り一般に、左右側および歯種内の相互の関連性はひくくなる傾向がある。

5) 下顎大臼歯における咬頭接触型の各型の出現は第5咬頭の存否すなわち主咬頭数とはまったく関係がない。咬頭接触型の分布様式は下顎各大臼歯でことなり、第一大臼歯ではY型、第二大臼歯では+型およびX型、第三大臼歯ではX型がそれぞれ主流をしめる。したがって下顎大臼歯の咬頭接触型にみられる進化あるいは退化傾向とよばれる現象は、各大臼歯の主咬頭数と関連性なくあらわれる。

6) 下顎各大臼歯の咬頭接触型のYおよびX型のなかにはY型から+型へ、さらに+型からX型にいたる移行型が種々ふくまれる。第一大臼歯のY型には+型への移行型、第三大臼歯のX型には+型より典型的なX型にいたる咬頭接触型が多くみられる。

7) 下顎各大臼歯の2個の中心窩の距離すなわち咬頭接触部の距離にもとづいて算出された咬頭接触型示数によると第一大臼歯はややY型、第二大臼歯は+型よりもX型さらに第三大臼歯は中等度のX型の咬頭接触型の傾向をしめしているが本調査の日本人の下顎大臼歯列の咬頭接触型の平均像は+型よりもややX型化した退化傾向にある。

## 審 査 結 果 要 旨

本研究は日本人約 800 人より印象採得した下顎大臼歯列の石膏模型資料に基づき、主咬頭数、付加結節ならびに咬頭接触型の出現傾向を確率論に立脚し、左右側間および隣在歯間におけるそれぞれの相互関係を調査するとともに、主咬頭数と咬頭接触型出現の相互関係をみなおし、ヒトの下顎大臼歯の進化の方向性をさぐろうとするものである。

得られたおおよその結論はつぎの通りである。

1. 主咬頭の一つである第 5 咬頭（遠心咬頭）の出現は第一大臼歯について第三大臼歯に高率にあらわれ、第二大臼歯にもっとも低率に出現する。この傾向はつねに主咬頭数が遠心大臼歯より減少する上顎大臼歯とことなるものである。

2. 第 6 咬頭の出現率は各大臼歯間に有意差がないものの、遠心の大臼歯ほどやや高い。第 7 咬頭は近心の大臼歯ほど低率ながらも多く出現する。

3. 主咬頭である第 5 咬頭、付加結節である第 6 および第 7 咬頭の退化傾向は各大臼歯におけるそれぞれの出現状態からみて三者三様であり、これらの形象は平行進化の過程にあるとはいえない。

4. 各大臼歯にみられる咬頭接触型の Y、+ および X 型の出現と主咬頭である第 5 咬頭の出現はたがいに独立事象であり、相互関係は全くない。

5. 主咬頭の第 5 咬頭、付加結節の第 6 および第 7 咬頭さらに咬頭接触型の出現に関しては、各大臼歯の左右側間の方が隣在歯間のそれよりも高い傾向にある。しかし最遠心の第三大臼歯に関する限り、これらの形質の左右側間および隣在歯間での出現の相互関係はひくくなる。

6. 咬頭接触型の分布様式は第一大臼歯では Y、第二大臼歯では+および X 型さらに第三大臼歯では X 型が主流を占め、下顎大臼歯では Y 型から+型をえて X 型にいたる退化すなわち進化傾向がある。ただし Y 型のなかには Y 型より+型に、X 型のなかには+型より X 型にいたる種々な移行型がある。

7. 咬頭接触型をより定量化するため、大臼歯の近・遠心中心窩間の径を測定し、算出した咬頭接触型示数よりみると、第一大臼歯は中等度の Y 型、第二大臼歯は+型よりやや X 型に、さらに第三大臼歯は中等度の X 型にそれぞれ偏く傾向がみられる。また本調査の日本人の下顎大臼歯列の咬頭接触型の平均像は+型よりやや X 型化した退化様相をしめしている。

以上のような本研究の所見は、ヒトの下顎大臼歯の諸形質の性状を明らかにするとともに、下顎大臼歯にみられる進化あるいは退化傾向とよばれる現象は単純な過程のものではないことが立証された。本研究は歯の形態学および人類学の分野のみならず広く歯学に寄与するところが大きく、歯学博士の学位記授与に値するものと信じる。